

〔調査報告〕

## 鬼師の世界

—黒地：鬼福製鬼瓦所，藤浦鬼瓦(1)—

The World of Ogre-Tile Makers

—“Kuroji” as Fired Tiles: Onifuku-seitojo, Fujiura-onigawara (1)—

高原 隆

TAKAHARA Takashi

愛知大学国際コミュニケーション学部

*Faculty of International Communication, Aichi University*

*E-mail: ttakashi@aichi-u.ac.jp*

### Abstract

Onifuku-seitojo is essentially different from other ogre-tile makers which I have described through the series of “The World of Ogre-tile Makers.” Though I did not notice the difference for a while until I started to write this article of Onifuku-seitojo, I suddenly understood the very important discrimination between Onifuku-seitojo and other ogre-tile makers in Takahama. The difference is either an ogre-tile maker type or an itinerant artisan type. Onifuku-seitojo belongs to the latter. Furthermore there seems to be a distinctive division between the two types. The division runs between Takahama (Takahama city) and Sinkawa (Hekinan city). The article is about the story of an itinerant artisan type of ogre-tile maker. I believe that this is one of my discoveries in the world of ogre-tile makers in Sanshu. It seems that a new view of “the World of Ogre-tile Makers” appeared in front of us.

三州鬼瓦の第4グループを描写している。このグループはさらに小グループへと分かれている。ただし、フラクタル状に枝分かれしているのではない。便宜上、幾つかある鬼板屋をまとめてひとつの集合の中へ囲い込みに過ぎない。第1グループ、第2グループ、第3グループは幹がしっかりした鬼板屋である。鬼板屋の系統樹といえわかりやすいと思うが、第4グループは系統樹が未発達な鬼板屋群である。このグループは第1、第2、第3グループに比べると、少なくとも一つ長所がある。鬼板屋の始まりが分かるのである。系

統樹が大きくなると、始まりの部分が「神話」になってしまう傾向が高くなる。第4グループは別の言葉で言うと、「神話を持たない鬼板屋」と言う事ができる。

## 鬼福製鬼瓦所

### 1) 初代 鈴木福松

鬼福の初代は鈴木福松という。二代目が鈴木菊一、そして三代目が鈴木博である。直接話が聞けたのは二代目の菊一と、現在鬼福を経営している三代目、博であった。鈴木家は福松のとき、初めて鬼板屋になっており、福松の先代（一太郎）は船頭であった。そしてその一代前は大工であったという。今も家には住吉丸という大きな船の旗が残っている。大きさが一坪、つまり<sup>むしろ</sup>筵にして二枚分ほどだという。そういった鈴木家へ福松は養子としてもらわれて来ている。福松がまだ小さい頃、鈴木家に入り、海の仕事は選ばずに何の理由からか鬼板師になった。菊一によると、福松は次のように鬼板屋の門を潜ったことになる。

こっから（鈴木家から）、ほら、三軒くらい前のところにね、天理教専門でやっとなるひとが…。今、天理教の看板が掛かっとなるけど。

そこにね、鬼萬さんという人があって、小僧っこば、二、三人抱えて。その、こう、あの、工場的一部分を借りて、鬼をやって、できるだけ、その、工場の人に提供するというような。

そうして、家がここだから、そいで、お爺さん、「ほういじゃあ、俺も」、昔は学校四年だそう。で、「行こうか」と。ゆうことで、ほいで、修業に入ったわけ。

つまり、鬼萬さんという人が福松の師匠ということになる。野々山萬作である。工場というのが瓦工場であろう。その中で鬼萬さんは鬼瓦を作っていたのである。たまたま福松が入った鈴木家がすぐ近くにあり、尋常小学校四年を卒業した福松は鬼萬の門を叩いたことになる。1907年（明治40年）以前は尋常小学校四年までが義務教育であった。つまり福松が10歳の頃、鬼萬の小僧になったのだ。現代からすると考えられない年齢であるが。

そうして、エー、やって、十、二十歳前だよ。二十歳前に…。昔はね、今さつきちよつと言いかけた、高浜の人は、ト、ト、ト、ト、ト、こう、天下り式でね、やって来たのが今の現在の鬼瓦。

新川<sup>べ</sup>辺ではね、ある程度まで、三、四年すると、ほうし出されるわね。「他流試合に行つて来い」と。「よその流儀と他流試合して来んような者は一人前になれんよ」と。昔の剣豪と一緒に。

だから、他流試合にほうし出されて、信州は長野の方からね、ほいから、高山の方からね。夏はあちらへ行く。こちらへ、静岡へ行くとね、静岡のところ辺で、焼津からあの辺をね。冬場はやって。

ほいでちょっと一ヶ月か二ヶ月、また、鬼萬さんへ戻つて来て、あと、全国をくるくるくと回つて、自分の腕を磨いて。そして、弟子、親方のところへ来て、これまでいっぺん見て下さいよと。ここで腕前の披露があると。

菊一の指摘から面白いことが分かる。高浜にある第1グループ、第2グループ、第3グループに属する鬼板屋の中で、旅職人として出ているのは第1グループ（山本吉兵衛系）では、山本吉兵衛、梶川百太郎、梶川賢一、梶川亮治である。第2グループ（神谷春義・岩月仙太郎系）では、初代の神谷春義と岩月仙太郎である。第3グループ（山本鬼瓦系）には旅職人の経験者はいない。そして最も旅職人を輩出している第1グループは、初代の山本吉兵衛を別にすると、高浜（高浜市）ではなく、隣の町の新川（碧南市）なのである。山本吉兵衛は後に第3グループの山本鬼瓦系と繋がり、吉兵衛の職人であった梶川百太郎は独立して高浜から新川へと移っている。つまり、高浜の鬼板屋では、初代はもともと旅職人であったが高浜へ定着すると、代々基本的に同じ鬼板屋で修業し、鬼板の技を継承して行っている。これに対して、新川にある鬼板屋は、弟子は基本的な技術を習得すると、旅職人に出される習慣があり、後々までこの習慣がかなり残っていたことが分かる。これが意味するところは大きい。高浜の各鬼板屋は自らの鬼板の流儀を継承・発展させていったのに対し、新川の鬼板屋は、旅職人として各地を渡り歩きながらいろいろな技を吸収・発展させていったことになる。ここに、「旅職人」を文節線とする別の視点からの鬼板屋をグループ分けする可能性が見えてくる。別の言葉で言うと、隣り合った町にも係わらず「高浜の鬼瓦」と「新川の鬼瓦」は質的に異なることになる。高浜の鬼瓦はよりローカル（純培養型）であるのに対し、新川の鬼瓦は各地のローカルなもの集まり、雑種、ハイブリッドであるといえる。別の言葉で言うと、高浜は「鬼板屋型」で新川は「旅職人型」とも言える。事実、新川には鬼板屋は少ない。独立した鬼板屋にならずに、鬼萬さんのように瓦屋の中で鬼板専門の職人として働いていたのだ。鬼福で戦後間もない頃、旅職人を菊一は実際に見ている。

わしら、ここへ（鬼福）来て、終戦二年目か三年目の頃にね、旅職人がやって来たですよ。その、ここへひょいと来て。

お爺さん（福松）がおつて。お爺さんがここへ。「変な人来たよ」。「変な人じゃない。旅職人でしょ」つて。「何か言ってるよ」つて。

盛んに、芝居やるようにして、どこそこの親方で、どっからどうふうに来まして。今晩一晩の、あれを、たの、やって下さいってって、頭下げてる。えんばらに、ちゃんと頭下げてる。

旅職人が突然、鬼福を訪れ、仁義を切ったのであった。そのことを菊一が話しているのがある。

お爺さん弱っちゃったねー。「こりゃ」つて。「どうすんだ」。「いい、いい、俺がまあ、遣ってやる」つて。ほいでおじいさんは、一往<sup>いちおう</sup>の飯を出してやって。「今晩はこれで」。「家族も居ることだから」、ということで。で、路銭<sup>みちせん</sup>をあげて。そうして、どの方面へ行くと、どういう宿があるから行って下さいよつて。そいで、はっきりと、その人は振り分け荷物を持って、法被を着て。これから出るかと思つたら出ないの。

「若い衆（菊一）、裏口無いかね」つて。私は若い衆になって、「若い衆、裏口無いかね」つて。「ええつ」つて。「裏口から出して下さい」と。ほいで、この裏にとまる。こっからさつと出て、「親方にご無礼言いました」つて。さつと出て行くという。まだ終戦四、五年目にはそういう旅職人があつたと。

この話は鬼福のうわさが、旅職人として福松が回っていた先々に伝わっていたことを物語っている。また旅職人の伝統も終戦後もしばらくの間は残っていたことになる。そして鬼福がハイブリッドの系統を持つ鬼板屋であることを同時に示している。

それから菊一は福松の鬼板の教え方を語ってくれた。本来なら新川の鬼板屋の伝統<sup>のつと</sup>に則つて、菊一も旅職人として出されるのが正式なやり方であつたと思う。しかし福松は菊一を旅職人に出さなかつた。理由は菊一が福松と同様に、養子として鈴木家へ入つて来たことがあげられよう。さらに、福松と違い、成人してから鈴木家へ貰われている。そういった養子婿を旅職人としてもう一度外へ出せなかつたのであろう。菊一は二十五歳で鈴木家に入り、福松の下で鬼板師の修業を始めた。ところが福松は菊一に鬼板の技術を教えなかつたのであつた。

「ちと教えて下さい」。「図面から何から教えて下さい」っての。「何をおせるだ，お前に」。

「自分でやってみて，ここが分からんから，こうだから教えなさって言うなら教えるんだよ，俺は。ただ教えよつては教えようが無いじゃないか」と。「まっとう修業しろ」と。「修業もせずに何をおせえるんだ」と。(第1図参照)



第1図  
初代 鈴木福松

菊一は福松のけんもほろろな答えに真っ青になったと思う。菊一は鬼板屋を継ぐという条件で鈴木家に入ってきたのでなおさら驚いたと思われる。困り入った菊一に手を差し伸べてくれたのがお婆さん（福松の妻，きよ）であった。

お爺さん，兄さん（菊一）に一度，兄さんに教えてやってやったら。

福松はそれに対して次のように答えている。

「何を教えるだや」ってって。「出来もせん者にどこを教えるだや」と。「出来てから聞きに来い」と。

そうして，ちと行ったら，「別に教えるとかないな」と。「いいの」って。「良くないで，教えるとかないんだ」と。「良くないんだって，お前は」。

「どう」ってったら、「お前さんの、全然なつとらんだもの」。な、だで、これは、「技術というものは、口で言えるものじゃないぞ」と。

そうした後に、福松は困惑し切っている菊一に大切な事を教えたのであった。

「日頃の製品を盗みなさい」と。「俺は盗め、盗んじゃいかんとは言わないぞ」と。

「盗め」と。

「技術でも、なに、盗むもんだ」と。「手でとって教えるものじゃない」と。「技術はな、内緒で盗むものだぞ」と。

「だで、俺は盗んじゃいかんとは言わん」。「囲ってやったら、そつと捲<sup>め</sup>くって見るもよし。書いて覚えとくもよし」。そして、「よその職人さんがだいぶ家<sup>うち</sup>はおるで、その人の良い所を、昼間行くと嫌がられるので、夜の間に見て来い」と。「その人の職場へ行つて見て来い」。「その人の利点利点を拾って来い」。

「それが上達の極意だぞ」と。

そう福松から言われて、弱り切っていた菊一にお婆あさんのきよはもう一つヒントを与えてくれたのであった。

お婆さん曰く、「商売はね、『あきない』ってってね、飽きたら負けるよ」と。「兄さん負けたらいかんよ」って。「『あきない』ってのが商売でしょ」ってね。

菊一はきよの言葉に胸を打たれたのであった。

こりゃあ、えれ一事聞いちゃったなあって。へっへっへ。(笑い)

飽いたら負けるそうだ。自分の、あの仕事に飽きが来たらもう負けだよね。飽いちゃいけないよと。

福松の人柄については三代目の博が語ってくれた。鬼板師の福松とはどういった人なのか博の話から浮かび上がってくる。

やっぱり職人ですので、商売気は無かったみたいで、物を作ってもやっぱり、金銭的にどうのと言うよりも、品物そのものという考えが根底に在ったようで、平たく言うと商売は下手でしたね。

その代わり、品物に関しては今流で言うと妥協しないというか、自分が気に入らなかつたら、夜、今で言う残業じゃないですけど、夜中でも思いついたら職場へ入ってって、前掛し直して、やり直すと。製品というか、作品が気に入らなければそういうことも頻繁にしたと、それは良く小さい頃から聞いていますけどね。

妥協を許さない根っからの職人で、鬼瓦を作ることに心魂を傾けていたことが見えてくる。何しろ福松は十歳の頃から「鬼師の世界」へ入っているのである。職人として鍛え上げられていることは否定の仕様が無い。その職人、福松の余暇について博は次のように語ってくれた。

これ余談なんですけど、博打が好きだったでね。あと、相撲が好きだったりとかで、今ほど娯楽が無い時代ですので、仕方ないかも知れんけど、やっぱり博打好きというのは昔の職人さんに、ある意味全部とはいわないけど共通する面があるんですね。

いわゆるそこの日本全国渡り歩いてても、やっぱりそういう遊び仲間が出来ちゃうというのかね。あの、博打を打ってればどこの者だろうとそういう事は関係無しに共通に遊び場がありますのでね。

ああ、だで、自分の地へ帰って来て、自分で鬼福を立ち上げた後でも、そういう遊び事は、まあ、変な意味でなく自分の肥やしになったのか知らないけど好きでしたね。話聞くとその当時ですと、まだ博打場と言うもんが在ったらしくてね。結構そういう職人さんたちが良いか悪いかは別問題として出入りしていたとかね。

また福松は博打は好きだったが、酒は全然飲めなかつたらしい。そして職人の割には結構社交的だったという。

おじいさんの時代としちゃ珍しい、北海道旅行ったりとかね。九州へも行ったりとか。まあ、その当時じゃ旅行行くということは珍しい時期に、もうしょっちゅう出てたけどね。

旅職人から鬼福になった福松は身体に覚えこんでいる「旅をする職人」を止めることは出

来なかったのであろう。そしておそらく旅をしながら一般の人よりも視線を上にして、見つめていたのは各地の鬼瓦であったと思う。「旅一職人」として各地の鬼を「盗んでいた」のである。そうして福松はハイブリッドな福松の鬼瓦を作り上げていったのだ。

福松は養子で、さらに菊一も養子だったので、博と福松とは直接血の繋がりは無い。ところが福松は博の父、菊一には厳しく接していたが、孫に当たる博には意外にも優しくかった。

今現在を見てみると、私も土に携わってこうやって鬼を弄<sup>いじ</sup>って、結局やるようになってますのでね。それなりにもう影響力も受けたし、背中を意識しないうちから背中を見て育って来ましたのでね。

昔だと、あの、この近くにプロのね大相撲だかが花巡業で来ると、よくお爺さんは相撲が大好きで、私を肩車に乗せてね、観に連れて行ってくれたのを私もほんのねおぼろ靡げながら覚えていますよ。それで私も相撲は嫌いじゃないし、将棋も教えてもらったし、いろんな博打じゃないですけど、まあ、それなりにね。今の親父のよりお爺さんの影響を受けている面もね、考えてみると、ああ、こんな事も実はお爺さんから教えて貰ったなって事がちよろちよろあるんですよ。まあ、孫だったもんで可愛がってくれたんだよね。

## 2) 二代目 鈴木菊一

菊一は現在碧南市に入っている西端の吹上にある中根家で大正10年12月25日に生まれている。鈴木家は新川の住吉町に在ることから分かるように菊一は鈴木家へ養子として貰われてきている。菊一の生家は農家であった。その三男坊として生まれた。

菊一とのインタビューは難しかった。理由は菊一が自分のペースでほとんどずっと語り続けたからである。それ故こちらから聞く間があまり無かったのである。小さい頃の思い出は語られていない。子守に行って十銭の小遣いを貰ったといったぐらいである。農家の生まれで勉強は出来なかったとも言う。ただ小学校の時の強烈な思い出があった。それが先生の教えである。菊一はその教えを深く胸に秘めていた。菊一の人生の生き方の原点が此処にある。

うちの小学校の先生（兵藤先生）の教えが強かったと。「ビりに居る人は真ん中まで来れるよ」と。「真ん中に居る人は上まで行けるよ」と。「遣<sup>や</sup>ってみなさい」と。「人生一度しかないぞ」とって事を、四年生のときに懇々<sup>こんこん</sup>として言われた。

其の時にこれは遺憾という事で、小学校出る頃には真ん中まで来た。ほいで、高等科というのが昔あってね。それがトップまで行きました。それで何とか成らんかと。



もうこれで俺は学業終わっちゃうんかと。

そいじゃ、今、豊田（自動織機）が良いからと。トヨタが内緒で軍需品造つとるそうだからそこに入ろうと。

当時、豊田は応募者中の一割弱しか入れない就職採用難関の会社であった。しかし無事入社でき、菊一は一所懸命にがんばり機械工一級試験にパスし、さらに養成工の指導員になっている。

ところが二十二歳の時に兵隊としてとられ海軍に行っている。また一から叩き上げられることになった。千葉の館山海軍航空隊へ予科練としていき、遂には空母天城へ乗船命令を受けた。しかし当時は飛行機不足で待機になり、四国松山の飛行場へ行かされ予科練の教官になっている。さらに1945年4月には金谷の特攻隊に入っている。そして8月15日の終戦の日を迎えたのであった。菊一は次のように言っている。

部隊長の命令としては「次期作戦命令の出るまで家庭において待機を命ず」という一枚の紙を貰って、全部、拳銃から持って西端（生家）に潜んどったですよ。だからわたしにはね、終戦ということもなければ復員というものも無いんです。悪く言うと脱走兵。

菊一は予科練での教えを、菊一が小学校四年生の時に先生から受けた教えとダブらせるかのように話を締め括った。

予科練をする時にもね、世の中の人にな、「一が在って二がないんだぞ」と。「二があると思うからお前らつい失敗するんだ」と。「世の中に一があって、な、二というものは全然ないんだ」と。そういう風でビシビシ仕込む。仕込まれるって。

厳しかったです。

菊一の人生はいつもどん底から始まり、その与えられた環境の中でトップに這い上がって来る事の繰り返しであった。終戦後、豊田に戻っていた菊一に養子の話が来る。

西端の方にもこの福松さんの友達が弟子親方になった子たちがあっちに居る。居るもんで、「ほいであそこで、ほいじゃあ、貰いあわせで、何とか跡取りつくらにゃあかんぞよ」ってな事から、「お前行けよ、行けよ」ってって言われて、「嫌だなあ、嫌だなあ」っと言いながらここへ来てしまったというのがほんすいだという事だけどね。

つまり福松の弟子の鬼板師から紹介され鬼福へ養子として来ている。しかもただの養子ではなく、鬼板師に成ることを約束しているのがあった。菊一が二十五歳の時である。そして勤めていた豊田自動織機を次のように言って辞めている。

俺は鬼板屋さんを背負<sup>しよ</sup>って立つということであらうから、わし、此処で辞める。

ここに第三のどん底生活が始まった。鬼福製鬼瓦所の親方は福松であった。養父で親方の福松は菊一に対して厳しかった。小学校時代、海軍予科練時代共にどん底からトップへと這い上がってきた菊一であったが、師匠の福松はこれまでのどん底からの方程式が当て嵌<sup>は</sup>まらなかったのである。つまり「教えてくれなかった」のである。

「ただ教えよつては教えようがないじゃないか」と。「まっとう修業しろ」と。「修業が足らんじゃないか」と。「修業もせんで、何をおせえるんだ」と。

菊一は心底悩み苦しんだことと思う。おそらく普通の養子だったら福松とぶつかり我慢が出来なくなって、鈴木家を出たかもしれない。ところが菊一には「どん底生活」に対する耐性が小学校時代、予科練時代を通して知識ではなく、身体知として<sup>からだ</sup>身体そのものにしつかりと備わっていたのである。しかもただどん底暮らしに甘んじるといった耐性どころか、反対にそれを打ち破ってトップを目指すという激しい闘志を持っていた。菊一は次のように言明している。(第2図参照)



第2図  
二代目 鈴木菊一

どんな事があっても、業界トップ、なにやらしてもトップでなければならぬ。一位があつて二は無い。何やっても小さい業界でも何でも良いからトップになんないよと。

トップに、絶対トップに。そんなトップになれんような人生はどうするんだ。

だで、ここでまた、よばあつて、貰い合わせが来てやった時でもだね。まずトップと  
いうことを狙っているから。業界でトップで行かないかん。

じゃ、生産は。生産はトップと。従業員はトップへ持って来にやららん。

なんと鬼板屋の知識や技術が無かつた素人の菊一が既にこういったような思いを心に秘め、福松と向かい合っていたのである。菊一がどのようにどん底から上がって行つたかは語られていない。しかし言明通りに後にトップへと進んでいる。

念願のね手作り製品トップを三年から四年通しました。従業員（職人）の数もその時十一人居りました。最高ですわ。やれやれと。その時に胃潰瘍が飛び出て難航しました。二十五に来てねえ、四十、五十になる四十八ぐらいに胃潰瘍が飛び出ました。それまで闘いに闘いました。今思うと本当に懐かしい。本当に懐かしい。（第3図参照）



第3図

経ノ巻唐破風吹流シ 鈴木菊一作

手作り職人の数が一軒の鬼板屋で十一人というのは本当に大きな数字なのである。文字通りトップを目指して菊一はやって来たのだと思う。インタビューを終えた大きな仏壇のある太い柱で出来た居間の西隣の部屋に案内してもらった。そこにはいろいろな鬼瓦が飾ってあった。菊一はそれらを指しながら説明してくれた。

親父が残しといてくれた観音さん。そいから天理教本部の雛形。これも本当にね我が家の宝になつとる。

だで、わしは親父が作ってくれた観音さんだから焼かないと。焼いたら観音さん死んでしまうんで。白地で取っついてあります。今。これ焼いたらね、観音さん、殺しちゃうでしょ。これは駄目だと。白地だから欠けるからと思ったら大事に扱いなさい。

これは観音さんじゃない。お爺さんだと。先代だと。初代の乗り移りだからこれは絶対に焼かないよと。(第4図参照)



第4図  
観音立像  
初代 鈴木福松作

### 3) 三代目 鈴木 博

鬼福を現在取り仕切っている親方は博である。昭和25年9月28日に生まれている。生まれも育ちも鬼福で過ごしているのので、初代福松と二代目菊一とは大きく違う。福松も菊一も養子として入って来ており、鈴木家にとっては二人はいわば異人である。三代目にしてやっと長男の博が生まれた。博は開口一番次のように語っている。

まあ、小さい頃からやっぱり、お爺さんなり親父の背中を見て土の中で育って来ましたので、自分がこの家業継ぐということをそんなに意識もしなかったし、今考えてみると、なんか、当然こんな風になったかなあと思うんですけど。まあ、多分この一、流れは変わらないから自分の代少なくとも自分の代は鬼瓦を作って過ごしていくと思います。

鬼福は博の代になって流れが変わったといえる。博のように親の背中を見て育ち、それがいつの間にか自分自身に跳ね返り、気が付いたら自分も親と同じ事をしていたと言う事は鬼福では絶えて無かったのであった。

小さい頃に一、もう、直接教えて、あの一、鬼瓦なら鬼瓦作ることを教えてもらったって言うこともそんなに無いですよええ。

自然のあれで、高校へ入って休みの期間が長い時期、高校2年、3年ぐらい今考えてみると、ちょっとやっぱり職場に入って、職人さんの隣で真似事見たいな事をね、してたことは覚えてるんですけどね。それからもう自然に、まあ、ちょっと自分のあれで申し訳ないですけど、上の学校も行かせていただいて、その時なんか二ヶ月以上休みがありますので、夏休みとか。そういう時はもう現実に、<sup>うち</sup>家入って窯積み手伝ったりとかね、そういう、あれ、もう自然に、別にアルバイト料もらった訳でも何でもないんですけど、自然にそれやる様になっちゃってましたねえ。

だから考えてみると、門前の小僧何とかじゃないですけど、不思議なもんですね、家業で親の仕事見ると一、継いじゃうんですよ。不思議なもんで。

子供の頃の思い出も凧揚げ、魚釣り、かっちゃん（ビー玉）、ばんき（面子）など色々な遊びをしているのだが、その中に一般とは変わった遊びが入っている。粘土細工である。

やっぱり、ほかのよその子が遊びに来たり、友達やなんかすると、やっぱりー、粘土で細工物作ってたりなんかすると珍しいですね。

「あれ、こんなもの作ってるの?!」って言って。いわゆる子供の頃ですので、まあ、怪獣作ったり、お人形さん作ったりー、皿作ったり、茶碗作ったりと。そういうことをほかの人から見ると珍しいというのか、案外ねえ、それ自分じゃ気が付かないけどね。

自分が作ったもの、あの一自分の家でももちろん窯もありますので、焼いてもらってたんですね、お爺さんとか親父に。

それ当たり前だと思ってたんですねえ。よその子から観ると「わーっ、良いね。出来たもの焼いてもらって」とか。そういう事ぐらいから自然にこうねえ、まあ気が付くというのか、付かんというのか、だと思っただけですねえ。

博はすでに小学校低学年の頃に夏休みの作品を粘土で作って学校へ提出している。それが「ロバのパン屋さん」であった。昔、地元実際にロバのパン屋さんが来ていたのだという。それを粘土に翻訳しているのだった。

仕事場へはもちろん遊びから入っているのだが、いつしか仕事がか見えて来るのであった。その変化を次のように語っている。

私、小さい頃からいわゆる職人さんって働いていただく人が何人か見えたもので、その人たちの周りで遊んでたって事は、あの一、記憶に在るんですけど。

鬼を作ったっていうのはやっぱり、高校2、3年ぐらいの夏休み中に、あの一、まあ、いわゆる製品を作るじゃなくてね。うーん、いわゆる職人さんの隣で、いわゆる「型紋」って言って石膏型があるんですけど、そこへ粘土を込んで、それをこう、ポツと抜いて、いわゆる物が出来ますよね、形が。それ見て多分、あ一、こんなもんかなという、そんな形から、こう、入ってったというのか、あの一、自然にねえ、職場に入るような形になったと思うんですけどねえ。だからもちろんそんな製品を作るというのは全然まだなんですけどねえ。

昔、博が小さい頃は鬼福には一番多い時で9人職人が働いていたという。しかもそのうち2人は何と家族住み込みであった。



9人ていうと、今の考えでいうと、なんだ大したことないなあと思うんですけど、いわゆる9人、昔の9人ていうと全員技術を持ってる人ばかりだから、大変なことなんですよね。今でも鬼瓦屋さんは三州には沢山在るんですけど、多分5人以上職人さんのみえる所はほとんどないと思うんですけどねえ。家が現実<sup>うち</sup>に今3人働いてもらっているんですけど。

これが菊一がいう業界トップの意味である。菊一の時はなんと一番多い時で11人であった。菊一と博の話を総合すると、博が中学生から高校生、大学生の頃に鬼福は黄金期を迎えていたように思われる。福松が亡くなったのが博が15歳の時なので、福松の技術と流儀の受け渡しが鬼福でほぼ完了し、多くの職人が鬼福の中に育っていたのである。

博は名古屋商科大学経営学部を卒業している。直接鬼瓦を作ることには繋がっていないが、帳簿をつける経理面では役に立っているという。大学では3、4年次頃から、自由な時間が増えてくる。博の場合、逆に家業に携わる時間が増えてきて、自然に家業を継ぐ形になっていったのであった。卒業して鬼福へ入り、その後、他の鬼板屋へは修業に出されてはいない。博はこれについて次のように語っている。

昔でいうと、あの一、小僧に出たりとかね、そう言うあれも在るんですけど。まあ、逆に言う<sup>うち</sup>と家でお爺さんなり親父なり技術持ってますので、まあ、ある意味じゃ伝承なんですけど、これ一、もう、それで済んじゃうんですね。

鬼瓦というものは、まあ、今は段々少なくなってきたんですけど、昔はやっぱり、ある家<sup>うち</sup>、家で、流儀が在ったんですよ。鬼、製品その物が。だから、よそ行くと、他の鬼瓦屋さんで仮に3年なり5年なり修業しちゃうと、そっちの系統というのかね、所謂、まあ、悪く言えば鬼福じゃないもの作っちゃうような形に成っちゃうんですね。

だから、ある意味では自分のとこの継承して行く事は、自分の親父なりお爺さんなりその流儀、流儀というのか、そういうもの継承していかないと、よそで教えていただいて、よその作り方の技術をマスターしちゃうと、まあ、極端なことを言うと鬼福が消えちゃうんですよ。

実際は菊一からなのであるが、博の代になって流儀が確立完成し、その伝統の継承が大きな問題に成っている事が分かる。反対に新川に在った他流試合、ハイブリッドの鬼瓦の伝統は鬼福では消えている。ところが現代では時代がさらに変化して、流儀の伝承それ自体

が大きく揺さ振られて来ているのであった。鬼福だけの問題としてではなく、三州鬼瓦全体の問題として揺れ動いているのである。

私が現役でやってるんですけど、今の三州でも鬼瓦ってのはちょっと所謂、二、三十年前よりも形が変わって来ているんですよ。

昔は一軒の家で、一事業所で、並物ってって安い一般的な駄物なんかからごく高級な社寺・仏閣みたいな物まで全部取り揃えて作ったんですよ。

でも最近それは少なくなつて、やっぱり、あの、今風で言うと、全ての物を用意しとくとコスト的にも資本的にも、大変ですので、そういうのを皆、もう、こういう世の中ですので、ちょっと無理になって来て、ある意味専門分野になって、例えば家ですと、もう経の巻しか作ってないんです。そうすると、「経ノ巻をやらないか」って問い合わせが来ると、家がまあ、経ノ巻の分野だったら大体を用立ててもらえると。

で、まあ、一般住宅のもんだと、誰々さんとこだと手広くやって見ると。在庫も沢山持っていると。そうすると家が一般住宅を受ければ、失礼ですけど、製品は責任持つて出しますので、家の製品じゃなくて取り寄せますと。

そういう形で皆お互いにね、ちょっとこうやり方が一時代前と変わってきてますね。ほいで組合の中がそういう体制になりつつある。無理して一から十まで一事業所で揃えなくていいと。得意分野だけ自分で大きくがっちり準備しておく。そういう形にしておけば、それで皆、グループで皆のを補えると。

事実、組合では共通の総合カタログを平成12年に完成している。それが『三州鬼瓦総合カタログ2000年度版』である。相互に必要なものを融通し合う「鬼瓦の自由化」、ビッグバンである。経済効率を基準に動き始めたのだ。昔の商取引と180度違うやり方に統一されたといえる。

私の親の時代とか、お爺さんの時代も、もっと極端なんですけど、商売相手の鬼瓦さんに買いに行くなんて事は。「人を助けてやることはない」と。そういう精神があったんですよ。だで、「商売敵だで、そんなところへ買いに行くのは自分が恥だ」と。自分が用立てられなかったと言う事に成っちゃうもんでね。そういう時代が続いてたんです。



この現代（21世紀初頭）における三州鬼瓦業界の大きな変化は生き残りをかけた動きである。しかし、何が犠牲にされるかといえば、各鬼板屋の伝統であり流儀である。三代も四代も掛けて築き上げて来た鬼板屋の流儀が経済効率という名の元に今消えようとしている。鬼福の場合で言うと、菊一の代で確立した鬼福流儀の生産体制が、次の博の代には早くも解体されようとしているわけである。博ははっきりとそのことを認識している。

共通する組合の土俵の中でお互いに融通しあうようなシステムが、今後ともどんどん進んで行くと、ごく、鬼瓦の始まりの時のような流派というか、各個人の家での作り方とか、細かく言えば一つ一つの鬼の形でも事業所によって違うような、作る人によって違うような、そういうのがどんどん薄まっちゃうんですね。

仮に、家が、鬼福が出した鬼でも、先ほどの体制で言うと、他のところから来た鬼が鬼福の窓口から出て行く可能性が十分あるです。だで、ある意味で言うと、逆に言うと、鬼福なら経ノ巻ばかり作っていると、すると経ノ巻が鬼福の流儀じゃないけど、同じような形が広まって行くと。昔みたいに一軒で全部作っていると、A社、B社があると、経ノ巻でもA社の、B社のあるですけど。そういうのが結局はそういうのが薄まっちゃいますわね。

もしこういった体制がさらに進行していくと、流儀の次には、実際の現場の作り手である職人の技自体に大きな影響が出てくることは間違いない。何しろ各鬼板屋は夫々得意とする（または割り当てられた）鬼板ばかりを作ることはある意味、チャップリンの『モダンタイムズ』のパロディーのような鬼板屋版ができることになる。それは昔の職人が何でも作っていた、または作れた世界とは対極の世界である。つまり三州鬼瓦版トヨタかんぱん方式ということになる。今、日本社会に広がっているコンビニも同じシステムである。コンピューター制御による迅速な交通手段に支えられた必要商品補充方式である。下手をすると、様々な流儀のある鬼板の世界は、ある時ハッと気が付くとノッペリしたモダニズムの顔に変貌しているのかもしれない。

菊一が鬼板の作り方を習うときの様子は既に紹介した。博の場合はどうだったのであろうか。博はそれについて次のように話してくれた。

うーん。直接はねえ…。まあ、まったく教えられていないというとあれなんですけど。まー、ほとんど80%から90%は自分で習うというのかねえ。

それか、もう、聞きに行くと、こっちからね。うん。向こうから「こうしろ」じゃなくて、「ここはこう出来ません」とか、「どうしますか」って言うと、「ああ、じゃあ、此処はこうの方が良いぞ」とか。

まあ、所謂教えてもらう人の方から、教える人の方からじゃなくて、教えて貰う方から「ここは思うように出来ません」とか、それから「この作り方がわかりません」とか。そういう事で、「ああ、じゃあ、此処はこうしろ」とか、「それからもっと、そこ見ながら、此処はこうするから、今度はこっち側もこうしろ」とか。

うーん。そういう形でね教えてもらった。うん。「ここはこんな風だと、次になった段階でここは出来ないぞ」と。そういう風に、こう、段階的に教えてもらった。そういう事で、まあ、教えていただくほうの、先生の立場からどんどん教えるということはまず無いですね。

博は80%から90%は「自分で習う」と表現している。博の場合は鬼福に沢山職人がいたの、見よう見まねで覚えていったと言う事になる。そしてどうしても自分でやってみて分からない所につかると、先輩の職人や親方に尋ねたのである。博はさらに次のようにも説明してくれた。一般的な意味での「教わる」または「教える」場所としての学校とは大きく異なる点の指摘である。

結局、最終的には売るものを作らなきゃいけない。売れるものを。ということは、あの一、出来ても失敗しちゃって、しょっちゅう捨ててるようじゃ困りますので。だから、もう、所謂技術の段階に応じて出来るものというのが在るんですよ、製品でもね。

まあ簡単に言うと、簡単なものから教えていくと。うん。徐々にね。そうすると、あの一、段階踏んでいくと作ってる人にもわかりやすいし、教えるほうも教えやすいしと。そういう形で、あの一、所謂製品でも、難しい製品、簡単な製品ありますので、所謂出来やすいものから順番に。

鬼板師の修業の過程が現実のビジネスに堪えうる商品化から離れていないのである。「売れるものから作る」ことが必要条件なのである。博はいつしか習う立場から教える立場になって話していた。博の鬼福での立場がそうなっているのだ。親方の目で話すといってもいい。

まあ、当たり前といえば当たり前ですけど、いつべんにドーンと難しいものじゃなく

てね。段階踏んでいくと。作る方も、こう…、無理せずにやっていますのでね。

ほいだで、この段階までの製品がやれると、じゃあ、次、この製品やってみようかと。うん。そういう形で、所謂出す方も、あの一、作ってもらうものを指示するほうの、そういうことを念頭に入れて職人さんに、まあ、教えていくというのか、仕事を出していく。供給していく。

そうすると前回まではこの製品が出来たけど、この次はもう一つ上の段階の難しい製品やってみようと。そういう形で、こう…、クリアして行くというか、そういう形ですよ。

「鬼師の世界」は修業即仕事なのである。そして仕事即修業でもある。なぜなら技術の習得に終点は無いからだ。

ああ、限界無いです。あるものが出来ればその上のもも必ず在るはずですのでねえ。もう、やればやるほど。

ただ次のような限界が来ることも示唆している。

現実に土<sup>いじ</sup>弄ったり、ある程度の重量というのか、重さなりも絡んでくると、ただ技術だけじゃなくて、今度は自分が歳いってくると、重いものはやれない。大きいものはやれない。そういう所謂現実のねえ、ギャップが出て来て、最終的にはもうどっかで止まるしかないという形に成っちゃうもんねえ。

これは修業に力点を置いた見方である。博は同時に仕事に力点を置いた見方も話してくれた。

でも、商売となるとやっぱりある程度妥協も必要でね。あんまり技術、技術と言っても、まあ、これ、あの一、小さな声になっちゃうけどねえ。それは、もう、「自分の気に入るまで作らにゃ」と言っても、結局、採算的にも合わないとか、納期に間に合わないとかねえ。

そういう風になると、現実に「商売」って言うことになると成り立たなくなっちゃうもんでね。

うーん。人間国宝かそんな風になれば別ですけどねえ。誰かお手当してくれるなら、そういう研究みたいなもんでもいいけど、現実に自分で作ったもの売って生活していくとなると、どっかに妥協というもの入りますよねえ。まあ、いい意味での妥協でね。ええ、でないと、もう、とてもじゃないけど…。(第5図参照)



第5図

三代目 鈴木博 嶋尾

鬼板屋においては修業と仕事と同じコインの表と裏の関係にあることがわかる。そのバランスがとれてはじめてお金(コイン)になるのである。福松の言う「上達の極意」はこの修業と仕事の密接な関係から生まれた職人の生きるための知恵なのかもしれない。「技術はな、内緒で盗むものだぞ」。

最後に瓦業界の変化の中の大きな流れである平板について話を転じたい。実際、色々な町を歩いていると、ほとんどの新しい家の屋根瓦は平板瓦になって来ている。和瓦の屋根を使った新築家屋は珍しい感じがするほどの状況になっている。平板瓦を使った屋根を博は「業界用語では」と前置きをして、「鬼を使わない屋根」、「棟を作らない屋根」、「棟を取らない屋根」と呼んだ。

我々から言うともまったく異質の屋根ということになって、我々から言うとも異質の建物になっちゃってるんですね。

で、本来はそういうものじゃいけないのです、そうすると今度は逆に、世の中の流れとして、平板が主軸になって来たなら、こちらが頑<sup>かたく</sup>なに昔のあれじゃなくて、今度はこちらが平板に合うようなものと言う事でね、皆さんそれなりに考えては見えるんですけど。

致命傷がね、鬼瓦を使うてことは、棟を積んでもらわにゃいかん。棟が無いことにはね、もう、そこが一番ネックみたいね。

それも、あの、変わったものを載せとけばいいやていう、鯪だの、獅子だのて。鬼瓦ては、そう言う物じゃないもんね。それは鬼瓦のごく一部であって、それは飾りのもんであって、主力になる鬼瓦ていうのはあくまでも、家の棟が付いてはじめて鬼が付くってというのが大原則だもんでね。それを変えるとなると鬼瓦の根本そのもの、考え方、形状、そういうものをゼロに近い発想からいかないと…。

鬼瓦の大原則を無視した屋根が平板瓦で葺いた洋風式の今流行<sup>はやり</sup>の屋根なのである。もともと西洋では屋根に鬼瓦を載せていない。その全く異なる様式の屋根を持つ建物を大手建築メーカーが日本へ導入し、今、全国へ広がっているのが現状である。建物の場合、一軒の家だけの好みの問題に留まらないのが問題である。町全体の景観に繋がってくるし、やがては日本全体の景観となるのである。異文化の衝突が日本の屋根の上で起きているといえる。それは喩<sup>たと</sup>えると和服（和瓦）と洋服（平板瓦）ほどに異なっている。日本とそこに住む日本人がそれほどまでに西洋化している証であるといえればそれまでだが、三州鬼瓦の伝統と伝承を根底から揺さ振りを掛ける大きな転換の時代に立ち会っているのは否定しようが無い。

## 参考文献

- 石田高子 1983年『甕のうた』愛知県陶器瓦工業組合。  
 駒井鋼之助 1963年『粘土瓦読本』彰国社。  
 三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合 2000年『三州鬼瓦総合カタログ2000年度版』三州鬼瓦製造組合・三州白地製造組合。  
 吹田市立博物館 1997年『達磨窯』吹田市立博物館。  
 杉浦茂春編 1982年『高浜市誌資料(六)』高浜市。  
 高浜市伝統文化伝承推進事業実行委員会編 2003年『鬼瓦をつくる～愛知県高浜市の三州瓦～』高浜市伝統文化伝承推進実行委員会。  
 高原隆 2002年「鬼師の世界―三州鬼瓦の伝統と変遷」『文明21』第9号：227-247。  
 ―― 2003年「鬼師の世界―黒地：山本吉兵衛(1)」『文明21』第10号：163-189。  
 ―― 2003年「鬼師の世界―黒地：山本吉兵衛(2)」『文明21』第11号：81-132。  
 ―― 2004年「鬼師の世界―黒地：神谷春義・岩月仙太郎(1)」『文明21』第12号：113-165。

- 2004年「鬼師の世界—黒地：神谷春義・岩月仙太郎(2)」『文明21』第13号：155-175.
- 2005年「鬼師の世界—黒地：神谷春義・岩月仙太郎(3)」『文明21』第14号：97-111.
- 2005年「鬼師の世界—黒地：山本鬼瓦系(1)」『文明21』第15号：183-208.
- 2006年「鬼師の世界—黒地：山本鬼瓦(2)」『文明21』第16号：93-116.
- 2007年「鬼師の世界—黒地：丸市, (杉荘), 萩原製陶所(1)」『文明21』第19号：55-72.
- 2008年「鬼師の世界—黒地：丸市, (杉荘), 萩原製陶所(2)」『文明21』第20号：75-100.
- 2008年「鬼師の世界—黒地：丸市, (杉荘), 萩原製陶所(3)」『文明21』第21号：73-95.
- ONIX 1992年『鬼瓦総合カタログ』ONIX.